作　曲

石塚 潤一

まず，2024年は，日本が記録的な円安に見舞われた年であった。2023年年末の為替レートは，１ドルが140円程度。これが円安基調のまま推移し，７月10日には１ドル161.61円という記録的な水準へと至る。各国の物価，賃金などを考慮した，実質実効為替レートをみると，今や円の実力は変動為替相場へと移行した1973年２月以前のレベルへと落ち込んでいる。クラシック音楽とは，元来，欧米からの輸入物であるわけだから，当然，為替レートの影響を大きく受ける。海外からの音楽家招聘の経費は増大するし，海外留学を目指す若者にとっては，経済面でのハードルがひと際高くなるだろう。経済的に潤沢な基盤をもつ者だけが海外での研鑽を続けられるという状態は決して健康的ではない。作曲界，ひいてはクラシック音楽界の総合的な地盤沈下を齎すだろう。音楽関係者も，経済，そして政治と無縁には生きられない。

個人レベルで海外との接点をもつ作曲家は数多い。たとえば，留学の合間に，あるいは，招聘されたイベントで，優れた海外の作曲家／演奏家と接点ができ，日本でも何かやりたい，と企画の提案を受けることは多々あると聞く。しかしながら，その多くは実現せずに終わってしまう。その理由の一つに，日本国内の公的助成の申請スケジュールが他国より概して早めで，提案を受けたときには申請できる助成がない，という構造的な問題があるのも確かだが，何より，円安と，続く不況のあおりにより，「とにかくお金がない」というところに行きつくのが正直なところという。不況が「ゆるやかな文化的鎖国状態」を生じてしまう可能性が懸念されている。

2024年もまた，訃報の多い年であった。中でも，３月３日に篠原眞が，７月21日に湯浅譲二が，12月11日に間宮芳生が没したことは，一つの時代の終焉を感じさせるに十分な出来事であった。2019年から23年にかけて，東京オペラシティ文化財団が，池辺晋一郎をプロデューサーに迎え，年１回，その年に生誕90年を迎える作曲家の作品を集めたコンサートを開催していたが，そのとき池辺が口にしたように，1929年から33年生まれまでは，日本作曲界の黄金時代ともいうべき，作曲家の当たり年であった。それには幾つかの理由があるだろう。そもそも，日本人はクラシック音楽の歴史に「遅参」したのだ。山田耕作（耕筰）が日本人による最初の管弦楽作品を作曲していた1912年のベルリンで，シェーンベルクは『月に憑かれたピエロ』を作曲していたという史実が示すように。そうした中，徒手空拳で西洋音楽の世界に飛び込み，アカデミズムと呼ぶに足る見識と技術を身に着けた池内友次郎や諸井三郎のような先行世代が既にあったこと。第二次大戦の戦争協力の問題から，多くのベテランが表舞台を去っており，敗戦後は若い作曲家の一挙手一投足が注目されたこと。映画，ラジオ，そしてテレビといった新興メディアが，作品発表の場を担保したこと。確かに，時代に恵まれていたともいえるだろう。そう，恵まれた時代に際立った才が切磋琢磨したがゆえの黄金時代なのである。日本のクラシック音楽界に，このような黄金時代が訪れることはもはやない。ゆえに，その財産は貴重極まりない。しかしながら，日本の音楽界はその財産の価値をどれだけ理解しようと努めてきただろう。武満徹に対する理解すらお寒い限り。この宝の山たる作品群の魅力すら言語化し発信できないならば，黄金時代とはほど遠い今の日本クラシック音楽界での創作の価値を，広く世間に問うていくことなどできるはずもない。かくして地盤沈下は続いていく。

そうした中でも，例年ご紹介している有志による現代音楽演奏会情報サイト「現代音楽イベントカレンダー」によれば，東京圏だけで466もの演奏会があったという。ほんの一部，講演会やレクチャーなど純然たる演奏会とはいえないものが含まれているといえ，不況下にも驚くべき数の演奏会が開催され，一日に重要な演奏会が二・三重複することもまた多い。このことは，特に東京圏で，客席数が百に満たない演奏会場が整備され，意図してライブスペースのような場を会場として選ぶ企画者も多いことに由来している。ただ，公演の内容が会場の大きさで計れることはなく，2000席のホールでうんざりさせられるような新作を聴かされることもあれば，50席のホールで明確な主張のある作品／演奏を聴き，耳を啓かれるような経験をすることもある。出かけてみなければわからないのが，コンサートというものなのだ。

さて，ここからは気になったコンサートを日付順に挙げていく。まず，神奈川県民ホールでのC×Cシリーズの5回目。夏田昌和とシェーンベルクを対照する会。このイベントは対照される２人の作曲家の志向性が違っていた方が面白い。夏田新曲も初演（1/13）。また，シリーズ６回目は酒井健治とドビュッシーで開催（5/11）。東京オペラシティのB→Cシリーズに登場した薬師寺典子が，ブソッティ，日野原秀彦の師弟関係など，各曲の関係性の細部まで神経を通わせた出色の回。日野原，桑原ゆうの新作も（2/13）。薬師寺は，11月に来日したシャリーノ臨席のもと行われた個展でも，その実力を発揮（11/15）。新作初演に前向きなチューバ奏者：橋本晋哉は，自身のリサイタルで稲森安太己の新作を初演（2/25）。取り上げる作曲家の選択に常に実験音楽ベースの独自視点を感じさせる井上郷子のリサイタルは，伊藤祐二を特集した（3/3）。地方発でも興味深いイベントが開催されている。作曲家／パフォーマーの足立智美が中心となり開催された，第一回金沢実験音楽祭は，地域色と国際色に富み，キュレーションの在り方に足立の個性が反映していた（コンサートは，３/8-3/10にかけて開催）。作品委嘱の目利きとして知られる合唱指揮の西川竜太は，自ら率いるヴォクスマーナの定期で，山本裕之，稲森安太己，伊左治直（3/21），近江典彦，渡辺俊哉を初演（7/16）。山本は，11月には自身の作品を集めての個展も開催（11/6）。東京現音計画は，昨年３回の演奏会を開催（3/22，7/10，12/5）。現代音楽に限らない尖鋭的な音楽への目配りを忘れず，その中で自らの存在感を示した木下正道（12/5）が白眉。年１回の演奏会で，コンスタントに委嘱新作を生み続ける低音デュオは，篠田昌伸，向井航などを初演（4/24）。サントリー・ホールのサマーフェスティバルでは，アーヴィン・アルディッティがプロデューサー役をつとめ，細川俊夫（8/22）坂田直樹（8/25）などを初演。作曲家の個展としては，湯浅譲二（8/7，8/12），川島素晴（9/2），鈴木治行（10/22），野田暉行（12/18）など。他に，現在では希少なオーケストラによる作品発表を行う同人：オーケストラ・プロジェクトでは，森垣桂一，松波匠太郎，山内雅弘，今堀拓也が初演された（11/27）。俳優の橋本愛が聴き手を圧倒したシャリーノのオペラ《ローエングリン》の日本初演もあった（10/5，6）。

尾高賞は，湯浅譲二が過去のマンドリン・オーケストラ作品からの編曲，『哀歌（エレジィ）』で受賞。NHK交響楽団による現代音楽コンサートMusic Tomorrowにて再演。湯浅が聴衆の前に出た最後の機会となった（5/28）。武満徹作曲賞は，イギリスの作曲家：マーク＝アンソニー・ターネジを迎えて開催。ターネジはファイナリストに日本人を残さず，香港のジンユー・チェンが１位（5/26）。芥川作曲賞は，石川健人，河島昌史，山邊光二がノミネート，審査員：新実徳英・望月京・山本裕之の討議の末，石川が受賞。波立裕矢への委嘱作も初演（8/24）。一昨年より非公開ながら演奏審査が復活した，日本音楽コンクールの作曲部門は，３名が本選に進み松本淳一が１位（11/７）。第12回 JFC作曲賞コンクール本選会は，テーマに「弦楽器の響き」。審査員は中川俊郎。6人が賞を競い斉芸琨が受賞（３/28）。第41回現音作曲新人賞は，審査員長に斉木由美，審査員に伊藤弘之，山本裕之。４人が賞を競い，奥田也丸が受賞した（12/19）。

また，本文中で挙げた３人の他，早川正昭（8/20），蒔田尚昊（冬木透）（12/26）が逝去し，海外からは，アリベルト・ライマン（3/13），ペーテル・エトヴェシュ（3月24日），ヴォルフガング・リーム（7/27），レイフ・セーゲルスタム（10/9），トム・ジョンソン（12/31）の訃報が届いた。

石塚潤一（いしづか・じゅんいち）

1969年，東京都生まれ。東京都立大学理学研究科修士課程修了（物理学）。2003年，柴田南雄音楽評論賞奨励賞を受賞。以後，音楽批評家。同時代音楽を中心にクラシック音楽，映画の批評なども行う。読売新聞，音楽の友，音楽現代，ユリイカ別冊などに寄稿。国立音楽大学，福井大学等で現代作曲家，音楽批評について講演。2008年より，コンサートの制作を行う。企画団体TRANSIENT代表，CIRCUIT同人。たまに頼まれ，作曲家や演奏家の写真を撮影する。